

## 演劇的アプローチによる絵本の読み聞かせの一提言

～ あかんべノンタンを題材に ～

絹 川 文 仁

### One guide to reading and performing a picture book in view of one essence of play

Fumihito KINUKAWA

#### 序

##### 絵本の重要性

周知のように、幼稚園教育要領<sup>(1)</sup>における「表現」は“感じたことや考えたことを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする～ねらい①いろいろなものの美しさなどに対する豊かな感性をもつ②感じたことや考えたことを自分なりに表現して楽しむ③生活の中でイメージを豊かにし、様々な表現を楽しむ”とある。

現実を見渡しても、月並みな言い方だが、インターネットをはじめとしたコンピューター等の情報伝達が当たり前になりつつある昨今、こと保育現場において、保育者と子ども達の直接的コミュニケーションが多様な意味で重要視されていくことは必至で、その中でも絵本の読み聞かせは、その素朴な行為に包含されていよう多くの保育的教育的価値および意味合いは、年と共に増大していくことは、誰しもが認めよう。嘗ての幼稚園教育指導書<sup>(2)</sup>でも“幼児は好んで絵本を見るが、これらの経験を通して幼児は次のことを身につけることができる・絵本を見る喜びや楽しさを味わう・美しい絵や物語などについて空想したり想像したり、あるいは感動したりして、情操を豊かにする・経験したことを再確認する・より多くの知識をえる・語いが豊富になり、理解する力や話す力などが増す・読書の基礎的態度ができる”“幼児に絵本を読んで聞かせる際には、間の取り方、読む速度、音量

など、内容にあった読み方を工夫する。”とまで謳われている。また保育所保育指針<sup>(3)</sup>に目を転じても“絵本や童話などの内容がわかり、イメージを持って楽しんで聞く(3歳児)。日常会話や絵本、童話、詩などを通して、様々な言葉のきまりや面白さなどに気づき、言葉の感覚が豊かになるように配慮する(4歳児)。絵本、童話などに親しみ、その面白さが分かって、想像して楽しむ(5歳児)。”とまであり、その重要性は如何なる視点をもってしても否定できない。筆者の推測では、どんなにコンピューター等が発達したところで、例えば絵本の読み聞かせのある特定の側面のみでは、保育者よりも機械の方が先鋭的なまでに秀でた機能を発揮するだろうが、保育者と子ども達のコミュニケーションという極めて総合的な因子や力学等が連続的断続的に作用する(せざるをえない)場面では、ほぼ永遠に機械が人間を凌駕することはないと確信している。

##### 本稿の趣旨

本稿では、筆者の専門のひとつであるオペラや演劇の視点から、絵本の読み聞かせの1マニュアルを構築することを試みる。題材は、保育現場のポピュラー作品たるノンタンシリーズから「あかんべノンタン」を取り上げた。この趣旨は、以下の二点に集約しうる。まずひとつは、オペラや演劇の視点の導入だ。多少なりともオペラや演劇の役者として経験したものは、オペラスコアの些細な休符にも大きな意味が宿っており、また台本のセリ

フにおけるちょっとした「間」にも、登場人物の何らかの心理が描写されていることを、よく弁えている。ならば、前述の幼稚園教育要領等で謳われているところの「豊かな感性や表現する力」「様々な表現を楽しむ」といった文言等を絵本の読み聞かせで具現するに、このような視点は大きな手助けになりえよう。二つめとして、敢えてマニュアルと位置づけた意味合いを説明したい。長年にわたって、特に教育界では、マニュアルなる言葉を、悪い意味での機械的、悪い意味での形式的といったふうに、ネガティブに使われてきた向きがある。しかし、これはマニュアルの意味をネガティブ的にしか捉えていない事は否めないのであって、人間は何事でも初めてやる場合は、大なり小なりマニュアル（的なもの）に頼らざるを得ないことを、疎かにした見方と言わざるを得ない。また、読めば読むほど曖昧な観念、或いは解釈によっては前掲の保育理念とは逆行する危険性が潜在する関連書物が散見される。これらについては後述するが、いずれにしても、物事の初期的段階では、先達によるきちんとしたマニュアルを学び、それがあるレベルに達し始めたら、少しずつマニュアルを超えた自分なりの創意工夫を加味していくという認識こそが肝要なのである。その意味で、本稿の提言は、絵本の読み聞かせの初学者に対して、可能な限り、具体的に詳細な根拠を明確にしていきながら、ひとつのマニュアルを提示していくことを試みる事とした。予め断っておくが、どんなに詳細なマニュアルを述べたところで、肝心の実践に於いては、最大限頑張ってみたところで、ひとつの手だてという範疇は永遠に超えられず、実践そのものに即到達しえない宿命的なもの～実践する者のそれまでの経験に裏打ちされた力量にかなり左右されるという意味で～は、常に弁えるべきなのである。

尚、「あかんべノンタン」を題材として選んだのは、筆者が担当する平成19年度本学こども学科二年次「総合演習」において扱った教材で、学生と共にその研究を積み重ねてきたものだからである。

### 絵本の読み聞かせについての既存の書物

読み手の力量によって、絵本の読み聞かせには多少なりとも差異が出るのと同様に、いかなる書物においても、

読者の力量や解釈によって、その書物の内容が七変化してくるのは当然のことであろう。それを重々弁えつつ、筆者がこれまでに接してきた絵本の読み聞かせについての関連書物についての雑感を以下の通り述べておくこととする。

○すなおに、飾り気なく、そして、できれば心をこめて読んであげてください。それがいちばんいい読み方だと思います。（中略）こつとか技術があるともいとも思いませんし、たとえあったとしても、それは右から左へ、伝えたり教えたりできるものだと思います。（中略）それに、読み方のじょうず、へたというのは、いったいどういうことなのでしょう。（中略）おそらく大勢の方が、ラジオやテレビで耳にする俳優の話し方や朗読を、じょうずなものと考えていらっしゃるのではないのでしょうかと思います。（中略）わたしは、何も、感情を出した読み方がいけないとか、棒読みがいいと言っているのではありません。しかし、読み手から自然に流れ出てくる以上に、何か技巧をこらして読もうとすることは、ことに家庭での場合、かえってお話をそこなうことになると言いたいのです。（中略）ほんとうにいい読み方というのは、読み終わったとき、物語の世界が、聞いた子の心に残る読み方をいうのだと思います。（中略）すなおに、飾り気なく、そしてできれば心をこめて読んであげてください。それが、いちばんいい読み方だと思います。<sup>(4)</sup>

○作品をそのまま伝えるためには、「読み手の余計な思い入れで読まない」という意味で「淡々と読むのがいい」と言う方がいます。しかし、淡々と読むというのは「どのようなのが淡々なのか」難しいことです。なおそれが続くと、聞き手が飽きてしまう場合もあるのではないのでしょうか。また逆に「作品を深く印象的に伝えるように、声の強弱、抑揚などを工夫して読む」と言う方もいます。そして、「あの人は“読み聞かせ”が上手」と言う場合は、声を変えたり、登場者になりきって演じている人への賛辞のようです。しかしこれは“読み聞かせ”ではなく演技になってしまい、本を伝えるより、読み手の演じているのが、印象づけられてしまいます。（中略）“読み聞

かせ”は“あなた流”が一番だと思います。誰のものとも違うあなたの無理のない“あなた流”が大事です。(中略) 難しく考えずに、その人その人の味、その人の読む本への思いが、押しつけではなく聞く人々の心に伝わることを大切にしたいと思います。<sup>(5)</sup>

私見では、以上の2冊の著述に代表されるような物言いが、保育界ではよく見聞されるようだ。成る程、「すなお、飾り気なく、心をこめて、自然に」「あなた流、誰のものとも違う、無理のない、難しく考えず、押しつけではなく聞く人々の心に伝わる」といった耳障りのいい言葉が並んでいて、毎日の職務に忙殺されている保育関係者には、おそらくホッとした気持ちで読み進められるものであろう。ところが、明言されていないものの、暗にマニュアルめいたものを大方否定してかかろうとする姿勢が、どちらからも透けて見えるのである。これによって、双方において根本的に欠けているのは、では、実際に「すなおに、こころをこめて」「あなた流で、押しつけではなく聞く人々の心に伝わる」には、どうすればいいのか、という具体的提示がないことだ。「こつとか技術がある」とも思わない、読み手から自然に流れ出てくる」「難しく考えずに、その人その人の味」といった、一見具体的そうなフレーズは見受けられるものの、少なくとも筆者は「本当に、自然に流れ出てくる、にはどうすればいいの？」と、以上のような文言を読めば読むほど「すなおに」沢山の疑問を抱いてしまうし、そう感じる方々も決して少なくないだろう。少しだけ広義に捉えていくと「こつとか技術がある」とも思わない」「自然に流れ出てくる」「あなた流」と提起すること自体が、ある種のマニュアルに当て嵌めているという問題意識が欠如していることから発せられるもの、とも想像しうる。念のために断っておくが、筆者は決して上記のようなフレーズ自体を全否定しようというわけではないし、マニュアルを無条件に信奉するものでもない。要は、良いマニュアルと悪しきマニュアルというものがあるのだ。良き方は、それを唱える者が、責任を持って具体的な根拠を示しつつひとつの方向性を示しており、悪しきは、その種の提示がないまま形だけ取り繕っているもの、と言える。「心をこめて読み聞かせをする」とひとつ言っても、その発せられる言葉によって、またそのTPOによ

って「心のこめかたが星の数ほど違って来る」ということをきちんと自覚しつつ、ある種の可能性や方向性を示唆していくといった作業は決して避けて通れないのである。杞憂であれば幸いなのだが、どうやら上記のような類の見解は、自分なりに寄って立つべきある具体的なマニュアルを確立しえなかった、或いは出合えなかった者達同士が、そういった実状と結果的に低い次元に留まっている現状をカモフラージュしつつ、あたかもマニュアルとは一線を画した「自然に流れ出てくる」「あなた流」という、まるで立派そうなポジションがあるという空想か幻想に浸っている感さえしてくる。さて、批判めいたことの羅列も下品の誹りは免れない。上記のフレーズを用いて、筆者なりに整理したものを以下に提示してみたい。「すなおに、飾り気なく、心をこめて、自然に」且つ「あなた流で、押しつけでなく聞く人々の心に伝わる」ように、結果的に絵本の読み聞かせができるようになるには、絵本にととまらず、紙芝居や演劇、そして音楽や美術等々、多くの表現芸術に身を委ね続けていくことが大切である。そこにおいては、当然の如く、沢山のマニュアルめいたものとも遭遇し続けていくのであって、その都度捨捨選択をしていかなければならない。その積み重ねから、絵本の読み聞かせにおける「あなた流」がようやくでき始めるのであり、それによって少しずつ「自然に流れ出るような表現」が可能となってくる。また、そういった積み重ねをし続けてきた者が、やっとなら「難しく考えずに」読めて、聞き手は初めて「その人その人の味」を感じ取れるのである。しかし、だからといって、どんな場面でもそれらが保証されるわけではなく、その確率が少しでも上向くよう、新たなマニュアル等を求め続けつつ、多様な経験を積み重ねていくしかないのである。以上は、全ての表現の宿命と言い切って差し支えないであろう。

他方、言葉尻をつかまえるつもりはないものの、「すなおに～」から「あなた流で～」といった表現そのものには、前掲の幼稚園教育要領等における「豊かな感性、表現」といったキーワードの意味合いとは、多少なりともかけ離れたものがあるといわざるをえない。もっといふならば、本来求められるべきものよりも、矮小化された物言いと受け止められても仕方のないものだ。勿論、最

最終的に「本当の意味で、豊かな表現」を得るための、ひとつのスタートラインとして「すなおに～」「あなた流で～」と位置づけるのならば大いに納得するのだが、残念ながらそれらの著述のどこを読んでも、その種の説明は見あたらない。

さて、中にはそれなりに親切で細かいサジェッションを提示してくれているものもある。

例えば、見出しだけ引用しても、①本の持ち方②めくり方がかんじん！③よく通る声で心をこめて④絵をじっくりと見せ、子ども自身に発見させよう⑤本に書かれたことばを大切に⑥作者・画家名も伝える⑦子どもの反応をキャッチしながら読む⑧余韻を大切に、というのがあつた。殊に、②では「読んでいる時に、ページがスムーズにめくれないと、せっかく盛り上がっているお話が中断して、聞き手も読み手も興ざめしてしまいます」、④で「お話の要になる絵のページでは、字を読み終えたあともしばらく絵を見せることがあります。子どもが絵を見ているようすを確認してから、頃合いをみて次のページに進みます。この「間」を大事にしたいですね」、⑤で「本の中のことばは、作者が推敲を重ねて選んだことば。大切にしてください。」、⑦でも「読み聞かせは、読み手と聞き手の心のキャッチボール。慣れないうちは読むのに精一杯で、相手の反応を見る余裕がないかもしれませんが、数回こなせばすぐにできるようになります。」といった具合に、著者の豊富な経験を伺わせるマニュアルやアドバイスが記載されてもいる<sup>(6)</sup>。

また、観念論に近いながらも、絵本の本質めいたものを、多様且つ深い視点から鋭く指摘した松井直氏のいくつかの著作は、読み聞かせの実践に大きな支えとなるものばかりだ。印象に残った部分を列挙すると、

- 絵本を選ぶとき、そして子どもに読み語るときには、読み手はその絵本を精確に読み取り、またその物語を読み手自身がいかにかいきと心に思い描き、楽しんでいるかどうか問われます。語り手の読み取り方は、その声と表情に微妙に反映して、聞き手の読み取り方に大きな影響を与えます。したがって読み手が特に気をつけねばならないことは、その絵本の挿絵から、どれほど詳細に物語を読み取っているかということです。ページをめくって挿絵を見せると

きに、挿絵が物語をどのように語っているかをしっかりと読み取っていないと、ただ機械的にページをめくることになりかねません。それでは絵本という独特の語りをもった芸術を生かすことはできません。大人はとかく挿絵を眼で見ただけだったり、あるいは絵画として鑑賞したりはしますが、子どもは挿絵に物語を読みます。絵はすみずみまで言葉に置き換えられるのですから、挿絵からも物語はゆたかに読み取れます。文が語っている物語の世界の中で起きたに違いないと想像される出来事を、すぐれた絵本作家は言葉に表現されてはいなくとも思い描いて、あくまで物語にそった形で巧みに絵で語る工夫をします。そういう部分を大人は見落としがちですが、絵本を聞き慣れている子どもは、しっかりと読み取る眼と感性をもっています。絵本の読み手、語り手は、大人の眼と子どもの眼との二刀流で挿絵を読み取っていかないと、良い読み手、良い語り手にはなりません<sup>(7)</sup>。

- 絵本がだんだん「自然」から離れて人工的になってゆく。スマートで楽しく、甘い後味の絵本が多くなった。気の利いた、洗練された感覚の絵本が次々と出版される。挿絵もきれいだし、印刷も良くできていて、色合いもすばらしい。しかし、何処か空ろである。通り抜けるには楽しいが、後に何も残らない。(中略) 絵本づくりの技巧は確かにうまくなった。しかしその反面、作者も画家も編集者も含めて作り手は、語るべきことを見失ってしまった。自分の存在をかけてどうしてもこれだけは語りた、伝えたいといった気迫のこもった作品にはめったにめぐりあえない。また語るべきことを持った数少ない絵本は、読者の気持ちを離れて自分の気持ちを先行させる<sup>(8)</sup>。
- 人間にとって、言葉はまずはじめに音であり、ひびきであり、リズムではないのか。言葉のもっている音やひびきやリズムが、まず赤ん坊の耳に入り、定着してゆくのではないか。言葉がやがて意味を持つようになるにしたがって、意味的要素のほうが強くなり、ひびきやリズムといった感覚的なものは失われてゆく。(中略) 今はテレビが幼児の言語教育をしているのかもしれない。(中略) おとななら読み飛ば

してしまうような部分に、あるいはおとなが見落としてしまうような挿絵のちょっとしたディテールに、子どもは思いもかけぬイメージをかきたてられることがあるように思う。だから、子どもにはこの程度の表現しかわからないだろう、子どもだからこの程度にしておこうといった気配の感じられる作品を見ると、とえてもいやな気がする。そういう人はこどものときゆたかな空想の世界の美しさを味わったことがないのだらうと思う。そんな人は決して子どものために何かをかこうなどとはおもってはいけないのである<sup>(9)</sup>。

上記以外にも、良識に支えられた松井氏の著述がかなり見受けられる。本稿においても、氏の知見は様々な意味で参考になっている。

## 本論

以下、本稿にて扱うのは『ノンタンあそぼうよー3 あかんべ ノンタン 昨絵大友康匠・幸子（偕成社 第144刷）1987』より、特に着目してみたいいくつかのページである。尚、本稿の趣旨とそれのあらすじは特に重要な連関はなく、またそれ以前にこのノンタンシリーズのどの絵本も、殆どの保育教育関係者には既知と思われるゆえ、割愛することとした。

見開きが右上の1ページ目である。私見ながら、筆者がノンタンシリーズを少なからず気に入っている要因を、端的に表現している見開きの絵である。あまりにステロタイプ的に勧善懲悪、或いはできすぎた美談等とは距離を置く、いたずらっ子ながらどこか憎めない、どこの幼稚園や保育園でも必ずいそうなキャラクターのノンタンが主人公であるところが、筆者の好きなファクターのひとつなのだが、この挿絵では、ノンタンが、敢えて「後ろ向きで」鏡台の前に立ち上がり、しかも「左足のみで立ち」、その上「しっぽは上にピンと伸び上がり」、両手は「隠れて見えない」という、行動も思考も目覚ましく発達する2～3才ぐらいの子どもの「遊び」や「いたずら」を彷彿とさせるものといえよう。特に、「後ろ向きで」描写されているところは、作者の一流のセンスを感じさせる。何故なら、演劇やオペラの舞台において、無能な



役者や演出家は、例えば何を演じるにも舞台中央で、客席正面にばかり働きかけがちになり、「記念撮影的舞台」と皮肉られることしばしばである。ところが一流のレベルになると、舞台全体を縦横無尽に活用、例えば敢えて主人公を舞台の端で後ろ向きに立たせる事によって、その場面における主人公の立場を客席に伝えるという工夫等が、当たり前のように為される。この見開きの絵で、ノンタンを「敢えて後ろ向きで」登場させることによって、読者達に「ノンタンはどんな顔つきなのであろう（鏡には映っていない!）」に始まって「これからどんな話が進んでいくのだろう」といった、想像や期待を喚起させる効果抜群なのである。

いよいよストーリーがスタートする2ページ目は、次頁である。

長年、学生を指導してきた経験から、彼らが絵本を読む時に、少なからず陥りやすい兆候をまとめると「どんな場面も、悪い意味で学校の教科書を読むかのごとく、無機的なまでの一本調子で、妙にきちんと読み過ぎる」「具体的な意図もないまま、それらしい言葉に何となく感情を移入して話す」といったようなことが挙げられる。たかが絵本されど絵本なわけで、言うなれば作者の意図

というものをあまり表現していないのだが、その原因を細かく探ると「挿絵を入念に見ていない」「ナレーションとセリフの区別が不明瞭」「ナレーションやセリフ等の字面が、どういった工夫によって配列されているか、といったことに気づいていない事に起因する読み方のメリハリの欠如」の、三点にはほぼ行き着く。換言すれば、「行間を読む」作業の大きなヒントが、この三点に内包されているわけで、よって本稿では、この三点を基本的な視点として、以下ノンタンの読み方をアナリーゼしていく。また、このような観点が、オペラのスコアや芝居の台本を読み進めるにあたって、最重要ポイントなのである。

紙芝居と同じぐらいに、絵本の読み聞かせでも、子どもにとって、前掲の松井氏の著述にもあるように、まずは絵に興味を集中することは間違いない。しかるに、読み手たる保育者こそ、子どもに先駆けて絵をじっくりと観察することは必須だ。この2ページ目では、文章を読まずとも「心地よい天気」に恵まれて、ノンタンがご機嫌のうちにお散歩に出かけるほのぼのとした状況が、お日様、あどけないカタツムリの表情、のんびり飛んでいる（おそらく）ハチ、そしてノンタンの笑顔等から、あっさりと見てとれるだろう。読み手は、この「心地よい」「ご機嫌な笑顔」「ほのぼのとした状況」を自らにマインドコントロールして、このページを読み進めていく事が大切な条件となる。さて、このページの文章は、ナレーションなのかノンタンの独り言的なセリフなのかは、微妙に賛否両論があるだろうが、そのどちらかは大した問題でなく、いずれにしても前述の大切な条件を満たすこ

とのほうがウエイトとして遙かに大きい。さてここで、「心地よく」「ほのぼのとした状況」を彷彿とさせるだろう、作者の「字面の配列の工夫」に気づかなければならない。即ち、1行目は「きょうは」のみ、2行目も「おひさま」のみ、であることだ。おだやかにたっぷりと間を空けながら「きょうは」から「おひさま」を読み進めるのである。無論、絵本には、言葉の教育を少しづつ施すといった重要な使命があり、子どもにとって読みやすい字面のスペースが配慮されている事も承知すべきだが、だからといって、単に読みやすいという理由だけで無意味に、或いは無秩序に、そのスペースが置かれていると捉えてしまったら、絵本というある種の文化を軽んじている事に限りなく接近してしまう。ましてや、このページは物語の冒頭、それなりの工夫がなされていると捉えることの方が、どんな見地からしても妥当なのだ。この読み方をより注意深くサジェッションすると、前述の、おだやかにたっぷりと間を空けながら、この間を空けている時こそ、最もおだやかにたっぷりとした気分を表現していく努力が肝要となるのである。これは、演劇やオペラをはじめとして、朗読劇など全ての劇、ひいては歌や演奏などの音楽等、全ての再現芸術といわれる領域における核心めいたものと断言しうる。要するに、有能なプレイヤーは言葉や音を発していないときも、否、発していない時こそ、別な某かの強烈なメッセージを発し続けているということだ。誤解を恐れずに言うと、いかにインターネット等が進化しても、ほぼ永遠に機械が真似はできないであろう、解釈的動物と称される「人間」のみに許された輝かしい特権とも換言できる事象なのである。少々飛躍するかも知れないが、だからこそ「生の人と人のコミュニケーション、ふれあい」というものは、最高にすばらしく、ある意味で最高に厄介なもの、といった見方にもこの問題は通底する。

以上に、筆者が本稿の柱となるコンセプトはざっと言い尽くしたので、以降は、それらは（了解済みのこととして）大凡の説明に留めつつ、それ以外の重要点も列挙しながら、この作品を読み進めてい



くこととする。

尚、このページで今ひとつ留意すべきは、4行目「たつたか たつたか」というノンタンがご機嫌に闊歩している擬態語だ。この種の擬態語に着目することは、芝居の世界においては初歩の段階だが、この読み方ひとつで、ノンタンが、どれほどどんろん気分で歩いているかがコンパクトかつ適確に表現されるという点で、やはり侮

が太字で記されており、そのダメ押しとも言えるほどの唐突かつ強烈な表現を誘導している。これによって「あっかんべえ」の常道ともいえよう、二度語られる「かたつむりさん」はあくまで平静を装いつつ、一転して急に驚かせる構図がくっきりと読み取れるのである。また、このインパクトを助長するように、のんびりと飛んでいた

ただろうハチでさえも、方向転換する軌道（おそらく驚いて）もしっかりと描かれている。これ程までの「あっかんべえ」をされたかたつむりさんは当然の如く、大変驚くのだが、ただ驚くのではないことが、字面から見てとれる。「ふにゃっ！」の文章が斜めに記されており、かなりの確度で、ノーマルではない声色（例えば裏声など）で発した声を意図したものと考えられる。

○5ページ

3ページに続いての、あかんべえ攻撃、である。例によって、二度繰り返される「うさぎさん」という呼びかけは平静のまま、突然驚かせるのだが、このシーン

ではいけないものがある。

○3ページ

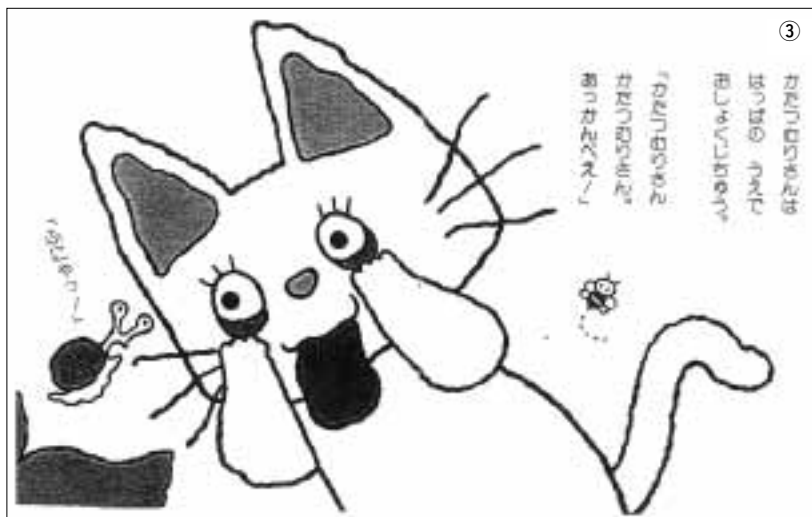
何よりもインパクトがあるのは、ページの大半を占める「ノンタンのあっかんべえの絵」である。

今更ながら、この「あっかんべえ」を本稿のごとく研究ノートとしてアナライズすることには、その本質めいたものを感じれば感じるほど、さすがに妙な違和感を抱いてしまうのが本音といったところだ。

がしかし、こども学科スタッフとしての研究ノートと再確認しつつ、論を進めた

い。おそらく保育室を取り巻く殆どの子ども達が、強烈なインパクトを受け、同時に相応のリアクションをするだろう、ノンタンのあっかんべえの大きな顔と身体。特に、目玉を剥きだしにし、舌を大きく出している描写は、セリフを入れずとも、殆どわかってしまうほどだ。しかも「」のセリフをよく見ると、「あっかんべえ！」

では「べんべろ」なる語が新たに追加されている。辞書等いくつかの資料を検索したものの見あたらず、明確なことは言えないが、あかんべえと同様に舌を出しながら、子どもながら挑発的に悪態をついてみせる擬態語であることは間違いないだろう。そういった意味で、3ページ目より刺激的な「あっかんべえ」となるが、このページにおける、作者の心憎いばかりの巧みな挿絵の配置を指



摘せずにはいられない。というのは、3ページ目よりも、ノンタンの「あっかんべえ」はページ右下に控えめに描かれており、三羽のウサギたちの方を誇張して大きく描かれていることである。これは、「あっかんべえ」のより刺激的効果を、ウサギたちのリアクションによって大きく表現した手法であり、3ページ目とは明らかに異なる、いわばそのヴァリエーションともいべき工夫が強く感じられる。この効果はまさに絶妙で、「あっかんべえ」を同じように繰り返さない「べんべろ」のリピートと同様に、ノンタンシリーズの愛読者ならば誰でも予測しうる、まだまだ続くだろう次の「あっかんべえ」はどんなパターンで出てくるかといった大きな楽しみを子ども達に抱かせるに不足しない。それと同時に、「べんべろ」が新たに加わって、より刺激的になったことに対するある種のバランス的配慮とも受け取れるのである。3ページ目では、カタツムリと一緒に驚いてのけぞったハチも、ここでは順調に付いてきている風で、ノンタンのおふざけに慣れた様子を醸し出しており、上記のバランス感覚に一役買っている。流石、初版以来144刷を重ねてきたノンタンシリーズである。以上から、ウサギたちの「わあ!」という驚きのリアクションに重きが置かれるべきで、特に折角積んだニンジンがひっくり返っていることを表現する意味でも、読み手は多少のアクションも交えてもいいセリフと推測する。

○11ページ

今度は、おひさま相手に「あっかんべえ」を仕掛けるノンタンだが、お決まりのセリフに微妙な違いが見出せ

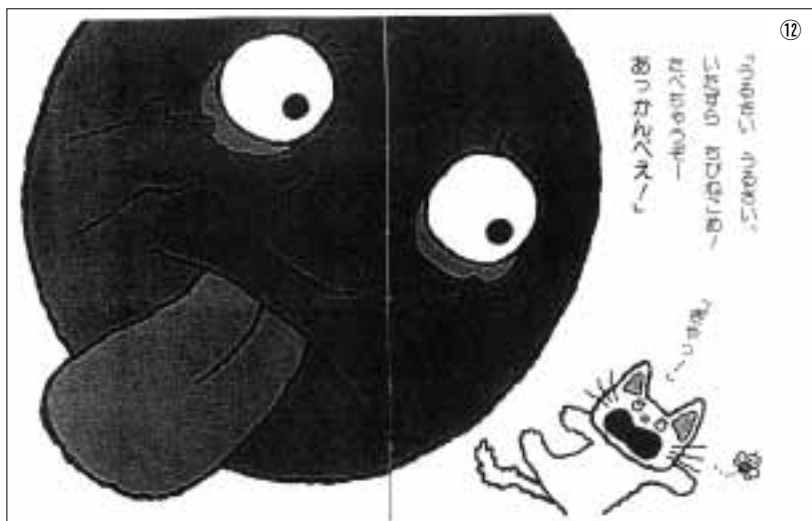
る。ひとつめは、2行目「たったかた」の後に「……」が施されていることだ。この「……」の解釈は、以下に落ち着くのではないだろうか。即ち、ますます意気揚々に「たったか、たったか」と歩いているうちに、たまたまおひさまがノンタンの目に入り、「よーし、今度はおひさまに、あっかんべえ、をしてみよう」というノンタンの気持ちの動きが、この「……」に託されているというものだ。それゆえ、読み手は、セリフにはないものの、無言のうちにこれらを表現すべきだ。こう述べていくと、以上の作業はとてつもなく至難の業のように思えるかもしれない。確かにそういった側面はあるにはあるが、筆者の体験では、上記のような「……」に託された意味合いを具体的に見つけ出す事の方が、労力を要する場合が多い。それさえ本人なりに明確に整理されれば、後は上記のノンタンの気持ちの移り変わりを、口には発しないで、頭の中で極めてはっきりと「あ、おひさまだ! よーし、今度はおひさまにあっかんべえをしてみよう」と、イメージすることを繰り返しトレーニングしていけばいいのである。唯一のポイントは、それぞれのセリフを口にしていない時に自ずと発せられるだろう、呼吸と眼差しである。具体的には、おひさまを見つけた「あ、」そして「よーし」への移り変わりを、呼吸と眼差しで表現していくのである。ふたつめは、おひさまへの呼びかけに「おひさまー、」と「おひさま!」と、これまでになかった符号が語尾に付いていることだ。この解釈は大して厄介なものではなく、ひとことめは遠いおひさまに向かう呼びかけ、ふたことめは（おそらく）おひさまがひとことめ

の呼びかけに振り返った事に対する、念を押したものと素直に位置づけられよう。ここでのノンタンも、これまでと同様に、左足をひょいと挙げた姿勢で「あっかんべえ」をして、なおかつ、暢気なまでに例のハチはのんびりと飛んでいる構図は従来通りだ。当然の如く、おひさまも、不意打ちでも喰らったように、驚いている。但し、その具体的理由までは考察できないが、驚いたおひさまのリアクションのセリフは登場しない。

○12ページ







○13ページ

この作品のクライマックスはまだ続く。一目散に逃げていくノンタンの様子が、ある意味で、しつこいほど詳細に表されている。「とととっ とととっ」というノンタンの慌てふためいて逃げ行く擬態語を、四度も挟みながら、ノンタンの悲鳴は断続的に続くのだから。細部については後述するとして、まず読み手は、このページをテンションを上げたまま一気に読み進める緊張感の持続が必要となる。ここまでの表現や描写を用いたということは、調子に乗りすぎたノンタンに対するしっぺ返し、或いは罰当たりといった教育的意図というものを、限りなくメッセージとして鮮明にしようとした作者の真意が明白だ。このノンタンが逃げる様子も、かなり綿密な工夫が伺い知れる。初めは「びっくり ひゃっくり にげろや にげろ。」と、落語や歌の文句にもなりそうな口調で言いながら、「たべられちゃうよーっ。」「たすけて!」と、どんどんリアルな表現に変容していく。しかも、その直後の3度目の「とととっ とととっ」の末尾には「……」が施され、おそ

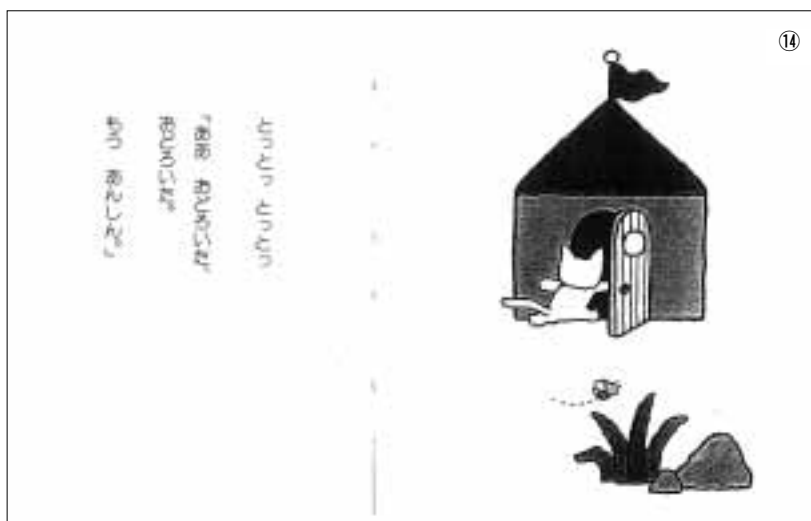


ノンタンシリーズの常であり、また白眉ともいえる、調子に乗りすぎたノンタンがしっぺ返しを喰らうシーンである。画面いっぱいに描かれたおひさまの反撃「あっかんべえ! (太字)」は、必ずや保育室の子ども達に教訓めいたインパクトを伝えるに十分なものだ。また、その前のセリフも「うるさい うるさい、いたずら ちびねこめ! たべちゃうぞー」と、迫力満点である。このおひさまの大きく描かれた様に見合った声色で、読み手はこのセリフを発するべきで、且つ、単なるはったりめいた大きさではない、前述のような教訓的意味合いをしっかりと滲ませた読み方も加味していくべきの、全作を通じて、読み手の最も気合いの入るべき場面といえよう。当然の如く、不意に反撃を喰らったノンタンは「ぎゃっ! (斜め字)」と、いつものハチと共に仰け反っている。

らく、ここでちょっとだけ立ち止まって、背後のおひさまの様子を伺ったノンタンの様子が託されていると判断しうる。にもかかわらず、おひさまは相変わらず凄しい形相なので、四つめのセリフ「ひどいよ〜」となり、続く「とととっ とととっ」となるのである。繰り返すようだが、以上のような作者の綿密なシナリオのもと、読み手はテンションを高くしたまま、一気にこのページを読み切らねばならないのである。ノンタンの悪戯に慣れきったいつものハチも、さすがにこの場面では一緒に逃げている。

○14ページ

やっとの思いで、家に辿り着いたノンタン。「もう あんしん」とも語っている。ところが～ストーリーの結末を知っているからこそ、以下のように論じていくこと



をご了承願いたい～このページをじっくり観察すると、右側にポツと置かれた家と、そこに逃げ込むノンタンの小さな姿、そして、左側の活字もかなりの余白の中にポツと置かれている状態だ。これまでの挿絵と文章とのバランスから見て、某かの不安要素をいまだノンタンが背負っており、またそれを予告したような構図と解釈して構わないような、ある種不気味な余白である。ただ、ここで最大限留意すべきなのは、視覚的には、あくまで

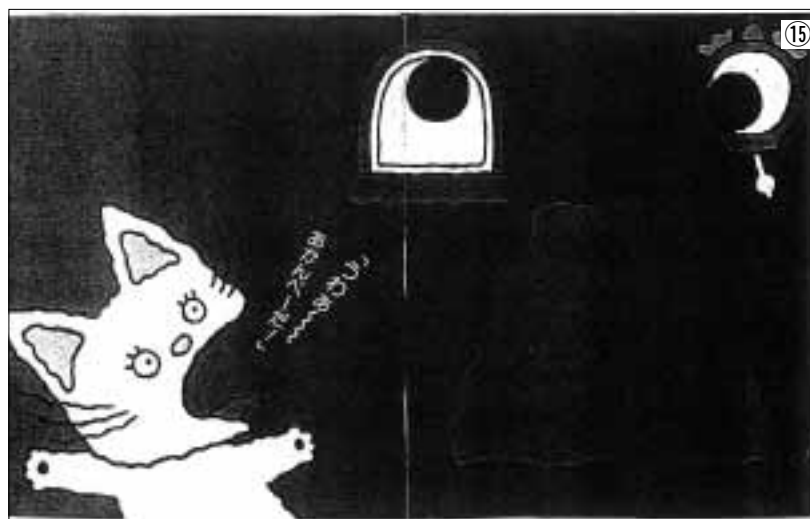
そういった不安なり、不気味さが漂うのであって、ノンタンのセリフにはそういう雰囲気は皆無であることだ。即ち、ノンタン自信はホッとて帰り着いたものの、このストーリーのギャラリーたる保育室の子ども達には「この先、ノンタンに何が起きるのだろうか？」という不安めいたものを投げかける、複層的なメッセージを有したページと捉えられるのである。それゆえ、ノンタンのセリフを妙に不安気に読むのは、場違い且つ逆効果だ。このページの挿絵を見せながら、いつもの暢気で屈託のないノンタンのペースで

言ってみせることこそ、そのコントラストとして、それをわかる子ども達には不安要素を煽るのである。再三再四言うようだが、表面はシンプルでいながら、多様な工夫が散りばめられているノンタンシリーズは、ひとつの芸術作品の域に達しているといって過言ではない。

○15ページ

このページも子ども達には大きな印象をもたらすだろう。何せ、ページ全体が、ノンタンの部屋による「あっかんべえ」と、なっているからだ。この大胆かつ奇抜な発想は、本当に脱帽するばかりである。このストーリーの前半から昼間部は、ノンタンが調子よく「あっかんべえ」の悪戯をし続けたが、「悪（戯）は必ず成敗される（しっぺ返しを喰らう）」とばかりに、後半のおひさまの反撃から立て続けに、大画面の印象を持って、ノンタンがやりこめられるシナリオは、ある意味で

単純なのだが、各ページに散りばめられた手法は、まさに手を変え品を変え、といった感じである。そしてこのページのように、ここまで大胆な発想の描写がタイムリーにあると、おそらく筆者のみならず、少なからぬ大人達もノンタンの世界に浸ること必定である。さて、さすがのノンタンも、自分の部屋までもが「あっかんべえ」をしたことに、恐怖を感じたかのごとく、セリフが斜めに記されているばかりか、身の毛まで逆立っている。読



み手は、そういった雰囲気～自身が震えているようなところまでテンションを上げて～このページを読み切らないと、折角の筆者の大胆な発想がほけてしまう。

○17ページ

最終のこのページも、ノンタンシリーズのお決まりのパターンなのだが、作者が意図するバランス感覚に今一



度言及せざるをえない。自分の蒔いた種ながら、二度にわたってしっぺ返しを喰らったノンタンが、前ページのまま意気消沈で終わったら、幼児期にある園児たちにとっても、その教育的効果よりも意気消沈の気分のほうが、色濃く伝染する危険性を作者は一早く嗅ぎ取ったに違いない。そこで、最後はいつもの明るく、茶目っ気のあるノンタンに戻り「あかんべえは こわかった。でも やっぱり やめられない、おもしろい！」と、言わせたのだろう。断っておくが、これは決してハッピーエンドといった類のものではなく、精神的に未熟な幼児期の子ども達に、得てして神妙かつ暗くなりがちな教訓的な比喩を、できる限り、明るく受け止めてもらおうという作者の最大限の配慮である、と筆者は確信している。それゆえ、このノンタンのセリフは、良い意味で前ページの後遺症めいたものは殆ど払拭したような明るさで、あっけらかんと言ってみせるのが、最も相応しいのである。

## 結び

前述のように、以上は、筆者の担当科目における研究報告である。ある種の客観性を求めるべく、実際にこの研究内容に接した学生達の見解、感想を以下のように披瀝することによって、本稿のまとめとさせていただきます。

- この授業を通して、読みの練習をしたり、読み方を変えたりして、絵本の奥深さを知りました。例えば、ノンタンはいたずらっ子のように表現したり、くまさんや太陽のように大きいものは、太い声でゆっくり読むようにすると、上手に表現できます。絵本に書いていないことでも、それに合ったリアクションで読むと、聞き手にはとてもわかりやすく伝わり、楽しめると思いました。絵本を読む上で大切なことは、登場人物になりきること、登場人物の気持ちを深く考えることだと感じました。また、ただ書いてある文章を棒読みするだけでなく、上手く表現するために、リズムをつけて読んだり、字の大きさに気づき表現することも大切なんだと思いました。
- （この授業で）最初にノンタンを読んだ時、こんなに絵本でも表現をするものなのかと思いました。私はこの授業を選んだ理由がもっと表現豊かに絵本を読めるようになりたいと思ったので、ノンタンでは多くのことを学ぶことができました。（中略）最初のページから、カタツムリの「ふにゃ」という擬態語があり、読み方が難しいと思いました。「あかんべー」の言い方もページによって少し違っていたので、それをどういうふうに分なりに読むのが難しかったです。
- 絵本は読み方ひとつで、こんなにも見えてくる世界が違うということを強く感じました。これまでも感情を全くこめずに読んでいたわけではないのですが、この授業を通し、今までの自分がどれだけ表現不足であったかがわかりました。読み手がたんたんとしていれば、聞き手はつまらないと先生がおっしゃっていたのがよくわかりました。表現不足の私が全く知らなかった表現の源になるものは、「呼吸」でした。普段特に意識せずに行っている呼吸ですが、実は表現をしたり、相手に気持ちを伝える時に大変大きな役割を果たしていることに気づかせて頂きました。また、表情についても同じことを感じました。
- ノンタンの絵本をしっかりと読んだのは、今回が初めてでした。ノンタンが歩く姿ひとつでも、読み方によって違ってくのだと感じました。「たったかた たったかた」を明るく楽しく読むと、本当にノンタン

がわくわくしながら歩いているように聞こえました。動物が驚く声も、息を混ぜた方が本当に驚いているように聞こえました。驚く声の読み方は少し難しかったです。

- この授業を受けて、絵本の深い読み方を教えてもらったり、上手な人の読み方を聞いて、今までの私の読み方は何だったのだろう…と考えてしまった。受講生みんな下手なわけではない。しかし、上手な人の読み方には引き込まれ、聞き入ってしまう。絵本の世界に入り込み、登場人物になりきって言葉を話す。そして、こう表現しよう、という思いまでが伝わってくるようだった。(中略) この授業を通して表現することの難しさを感じ、表現できるようにするための方法と努力しようとする姿勢を身につけたい。
- ノンタンの読み方を学んで、今まで小さな子ども向けの簡単な絵本だと思っていたが、思っていた以上に奥が深い絵本だと思いました。ノンタンは3歳くらいで、友だちを驚かせて大喜びして、いやらしいことに友だちに声をかけるときは何もないようなそぶりをしてあっかんべーをする。ノンタンがどんな子なのか、自分がノンタンだったらどんな行動をするのかなどを考えて、ほんの少し工夫をするだけで、だいぶおもしろくなりました。
- ノンタンは、幼稚園児には子ども過ぎて向かないので、もう少し違った絵本が良いのでは?と思った。保育者が、明るく楽しそうに声を変えるなどの工夫をすれば読めるだろうと思った。しかし、読み進めていくうちに、奥が深いことを知った。今までは、多少の抑揚と、声を変えて変化をつけるぐらいしかやってこなかった。今回は、大袈裟に表現した。ここまで大きさに表現していいのか疑問があった。あまり、大きさにやりすぎると、よくないと聞いたことがあったからだ。しかし、読み進めていくうちに、ノンタンやまわりの友達がどういう気持ちなのか、ここはどう表現して読むのか、声の大きさ、スピードは?と考えるようになった。絵本ひとつ読むにしても、登場人物の気持ちを考えたうえで、どんなトーンで読むか、どう表現するか工夫することが大切だと思った。

- 周りの人達が気持ちを込めて読んでいるのに、とても驚いて自分も頑張ろうと思った。ノンタンや他のキャラクターの気持ちを声色を変えて表現するのが難しかった。特に、オーバーに表現しなければ相手に伝わらないから、朝から声が出ないというもあり、大変だった。ノンタンという絵本は昔から少しバカにしていたが、この授業ではとても勉強になると思った。
- この授業を受けるまで、絵本の読み聞かせについてこんなに深く考えさせられることはなかった。授業の最初の頃は、なかなかこの絵本の核をつかめずにいたが、読み進めていくうちにだんだん、自分らしいノンタンの読み聞かせというものが見えてきた。セリフとナレーションのメリハリ、間のとりかた、全体の文章の繋がりである。特に、文章途中で不自然な間を作らないように、リズムカルな流れで読み進めることに注意した。
- この授業でノンタンを読んでみて、字の大きさや書き方など、とてもたくさんの工夫がしてあったので、とても驚きました。小さい子向けの絵本なので、絵がかわいくて読みやすいだけだと思っていたので、まさかこんなに工夫がされているとは思いませんでした。(中略) 一年生の時の言語指導法では、こんなにリアルで感情的に読むことはなかったので、とても不思議な感じがしました。
- 最初はこんな感じだろうかとの自分の思う通りに読んでいました。でも、こんな読み方では幼児には伝わりにくいし、見てもあきってしまうだろうと思いました。他の人の読み方、先生が言うポイントなどに気にしながら聞いていると、確かに、こうすればこの場面がどういうことなのか伝わるというのが、だんだんわかってきました。
- このノンタンを通して、こんな方法もあるんだということがわかりました。ただ声を変えて読むのではなく、顔の表情を変えてみたり、リアクションもつけるなどの工夫次第でいろいろなノンタンが楽しめると思いました。
- 字の大きさ、角度が違うことをはじめで知りました。また、その字の書き方の工夫に作者の思いが込めら

れているということに気づくことができました。(中略) 同じ走る音でも楽しくはずむように読むのと、何かに追われて急いで走っているように読むのでは読み方が全然違うということがわかりました。

- 私は絵本を感情を込めすぎずに読むことが多く、またそのように読むことが良いとされていた実習園だったので、一語一語どういう気持ちか字の中に隠されているか見つけ出し、表現する、子どもへのパフォーマンスを考える授業は、ノンタンのみならず絵本の世界が広がったように思えました。
- 授業で少しづつ読みながら考えていくと、作者がどういう気持ちで読んでほしいかということを感じさせられました。(中略) 1 ページ目の「いきぶん」「おさんぽ」は上に上げる感じで元気に読むのに対して、2 ページ目の「おしょくじちゅう」は、下に下げてナレーターの感じに読むなんて考えもつきませんでした。また、息の使い方だけでこんなにも読み方に抑揚が出てくるのだと学ぶことができました。凄く絵本の中に入り込んで楽しいと思いました。
- 絵本を読む時には、その絵本についてじっくり考えなければいけないのだと思った。「なぜそのような大きさに書かれているのか」「その時の登場人物の気持ちはどうなのか」などを考え、自分で読み深めればもっとその絵本がいきいきしてくるのだと思った。意識して読むことは大切だと思った。(中略) ノンタンがお日様を見つけたとき、「イヒヒヒ」と忍び笑いを入れて読んでいる人がいて、そうするとノンタンが次のイタズラのターゲットを見つけたということがとてもわかりやすくなり、素敵だなと思った。
- 1 ページ1 ページごとの先生の細かいアドバイスを聞いていると、そんなに簡単なものではないと痛感しました。先生のアドバイスを聞いてまず思ったことは、文章を読む前に、絵の内容や文字の大きさ、間の長さ等を考えてから読んだ方がいい、ということです。(中略) そのため普段何気なく読んでいた文を、じっくりと時間をかけて考えるようになりました。すると、不思議と本の内容に感情移入していく自分の姿に気づきました。(中略) 自分ではそんなことを全く意識していなかったのに、本を読もうとす

ると、自然に体が動くようになったのです。「ああ、これが表現ということなのか」と思いました。端から見ていると、少し恥ずかしい姿に見えるかもしれませんが、私はそのほうがうまく読めるように感じました。

以上が、大凡本稿の内容をポジティブにアクセプトしたものである。しかし、以下のように懐疑的な意見もいくつか見られた。

- 私は大袈裟に読む必要はないと思う。作者の思いを感じることは大切だと思う。しかし、作者の思いが正しいかどうかはわからないし、あくまでも自分が感じ取っただけである。だから、ある程度の表現をすればいいと思う。
  - 授業では、登場人物の声色を大袈裟に変えるように、と言われました。しかし、他の先生から絵本は読み手の顔色が見えるため声色を大袈裟に変えなくても良いと言われていたため、その違いに戸惑いました。私は人によって読み方があってもいいと思うし、全員が読み方を統一するように練習しなくてもいいと思いました。
  - この授業で学んだ読み方は少しやりすぎだと思う。絵本に載っていない擬音を使う必要はないし、絵本ではなく劇のようだ。私は絵本の範囲での表現を学びたかったので、残念である。また、先生の解釈を押しつけるのもどうかと思った。それぞれの学生が解釈したものを生かしてほしかった。
- 前者ふたつは、ある程度は領けられなくもないが、根底的には、本稿の序論「既存の書物」で指摘した問題と共通といえよう。また、三つ目の意見は積極的な批評を展開してくれているゆえ、ある種の礼儀の意味でも、若干の説明を補足しておく。まずは、「やりすぎ」或いは「絵本ではなく、劇のよう」との指摘は、まさに筆者は本稿、そして授業において最大限そういった表現効果を狙い続け、常にそのことを確認してきたわけであるから、あっさり言って、それをポジティブに捉えるか、ネガティブに捉えるか、の相違でしかないのである。また、表現というものの本質を垣間見た場合、大袈裟、或いはやりすぎのものを抑制するのは、それなりの留意と経験でコントロールできるパターンが殆どなのだが、表現のス

ケールが小さい、消極的なままである状態を、より大きいものに拡大していくことは、かなりのエネルギーが必要とされることを認識せざるを得ないのである。また、「先生の解釈の押しつけ」には、表現のみならず、教育というものの本質に言及せざるを得ない。大なり小なり、全ての教育というものには押しつけの部分がある、否、ないとおかしいわけで、本稿の序論でも力説した、初学者に対するマニュアルの伝達というものをある程度のレベルまで施すことが、最低限の教育的責任なのである。その段階を、押しつけと捉えるのは全くの不適切、場違いなのであって、授業でも開陳したのだが、「学ぶ」と「まねる」の語源が同一であることをしっかりと認識すべきであろう。だからといって、学生達の解釈を無視するわけではなく、指導者側の解釈をそれなりに理解した上で、敢えて別な解釈も可能ではないか、といった類の意見に対する受け皿は喜んで用意してきたし、今後もそのつもりでもいる。

## 引用、参考文献

- (1) 幼稚園教育要領概説 フレーベル館 初版 p,123~135 1999
- (2) 幼稚園教育指導書 領域編 言語 フレーベル館 32版 p,109~160 1999
- (3) 平成11年改訂 保育所保育指針 フレーベル館 初版 p,33~56 1999
- (4) えほんのせかい こどものせかい 松岡享子 日本エディタースクール出版部 18刷 p,13~17 2004
- (5) 読み聞かせボランティア入門 波木井やよい 国土社 初版 p,60~61 2006
- (6) 読み聞かせわくわくハンドブック～学校から家庭まで～ 代田知子 一声社 第1版 p,44~53 2004
- (7) 絵本のよろこび 松居直 日本放送協会 第2刷 p,44~45 2004
- (8) 絵本を読む(新装版) 松居直 日本エディタースクール出版部 新装版第1刷 p,138 2004
- (9) 絵本とは何か 松居直 日本エディタースクール出版部 第24刷 p,165~206 2003